2003.7岡村昭彦の会 NO.13

本当に〈いのち〉を大事にするとは
―木村利人氏をお迎えして

第18回ＡＫＩＨＩＫＯの会開催

ジャーナリスト岡村昭彦が亡くなって十八年になります。そして世紀があらたまって三度目の「ＡＫＩＨＩＫＯの会」。今年は三月十六日（日）に、東京神楽坂・日本出版クラブ会館で開催されました。

岡村は一九七〇年代を「生命操作が可能になった新しい人類の歴史段階に入った」と語りました。三十年後の現在、心臓移植が現実となり代理出産や六十歳（閉経後）の女性の出産さえ可能になる生殖技術、さらには〝クローン人間〟の誕生も目の当たりにしようとしています。このように加速する〈いのち〉の時代にあって「私たちはどんな時代に生きているのか」「人間はどこから来てどこへいくのか」が問われています。

講演中の木村利人氏

そこで今回のメインゲストは、バイオエシックス（生命倫理）という学際運動の第一人者であり、また岡村昭彦の最良の理解者でもあった木村利人さんに〈いのち〉の情況にふれて語っていただきました。主題もアクチュアルに「クローン人間誕生時代の〈いのち〉を考える」。

木村利人さんは講演の中で「岡村さんは〈いのち〉を大事にするということはどういうことかを自分の身に引き受けて考えている人だった。ヴェトナムの私の家で、娘が紅茶をこぼして火傷をしたとき、『ちょっと待ってて』と急にいなくなったと思ったら、戦線で銃弾の傷とか、火傷をしたときにつける、大切な薬を娘のためにホテルに戻って取ってきてくれた。」というエピソードを交え、「今日のクローン技術による人間生命の誕生は、従来から子どもは天から授かる『子宝』としてきた両親の驚きや喜びの感情に致命的な変化を生み出すことになる。それは『人の尊厳』の否定につながり、人間の基本的権利への侵害である」と語りました。

後半に、枯葉作戦の影響で、今なお奇形の赤ちゃんが生まれているベトナムの情況をビデオで紹介。質疑応答も活発で多いに盛り上がりました。

第二部懇親会では、木村さんを囲んでいつもの通り愉しい会となりました。今回も南は長崎、北は北海道、さらに三重、滋賀、奈良、岐阜、愛知、静岡と遠方からの参加があり、新しい出会いと交流の会ができました。参加者は四十九名。

“クローン人間誕生”時代の〈いのち〉を考える

木村利人

きむら・りひと　一九三四年東京に生まれる。早稲田大学大学院法学研究科博士課程修了後、ハーバード大学研究員等を経て、八九年以降ジョージタウン大学ケネディ倫理研究所アジアバイオエシックス研究部長、ジョージタウン大学医学部客員教授、八七年以降、早稲田大学人間科学部人間健康科学科教授。同大学国際バイオエシックス・バイオ法研究所長。現在に至る。

岡村さんがベトナムの前線から戻り、ふらっとサイゴンの私の家に現れた時の様子を思い出します。

岡村さんの撮った写真は『ＬＩＦＥ』誌の表紙に何回も登場しましたが、類まれな才能と勘と実行力で世界的に大きくインパクトのある情報を発信し、そしてアメリカのベトナム戦争が終わるきっかけをつくりました。今日、そうした岡村昭彦さんを知っている人はほとんどいないと思うので、当時、刊行された『ＬＩＦＥ』誌を持ってきました。この表紙には「TOUCH GOING IN LAOS」と印刷されていますが、この一九七一年三月十二日号の表紙は、岡村さんが撮った写真です。

一九七一年の二月に「ベトナム軍とアメリカ軍が共同して何かやっているらしい」という噂が流れたのです。そのときにニクソン大統領は否定しました。ワシントンが公式に否定したにもかかわらず、岡村さんはその前線に行って、戦闘をしているところを撮ってきたのです。それが『ＬＩＦＥ』の表紙となったのです。これで怒ったのがニクソン大統領。これがベトナム戦争が終わるきっかけになりました。

この『ＮＵＭ』（同朋舎出版）という本に、この作戦「ラムソン七一九作戦」のことが書いてあります。これを見ると、一月ぐらいに許可が下り、二月八日から作戦が始まっています。そして「二月十一日、ワシントンは米軍がラオス国内で作戦に従事しているという説を否定した」と、正式に否定しているのです。「ニクソン大統領、米軍の航空兵力行使の限定を拒否。そしてニクソン支持率、就任以来最低の水準にさがった」と書いてあります。そして岡村さんは「二月二十二日ラオスに侵攻をした南ベトナム軍がベトナム国境から僅か二十九キロメートル地点で停滞」と書いてあり、正にその停滞しているところの写真を上空から撮っているんです。

岡村さんが、世界的なフォトグラファーであり、国際的に影響力のある写真を撮ったと、この本にも書いてあるのです。

岡村さんは、ベトナムでの生か死かのぎりぎりの取材の中で、自分の〈いのち〉、また仲間の〈いのち〉、そして攻撃する側、される側の〈いのち〉の問題を考えていたと思うのです。war photographerとして、本当に〈いのち〉を大事にするということはどういうことなのかを自分の身に引き受けて考えていた岡村さんだったからこそ、後半生にBioethicsの問題に取り組むことになったのだと思います。

■〈いのち〉から連想するもの

今日は「“クローン人間誕生”時代のいのちを考える」というテーマですが、「〈いのち〉という言葉は、皆さんにとってどういうイメージでしょうか」。

僕は大学でのBioethicsの授業の一時間目に学生に質問するんです。第一の質問は「君たち、〈いのち〉って言われたとき、パッとどういうイメージが浮かぶか？　そのイメージ言ってごらん」。第二の質問は「〈いのち〉ということばが入った慣用語句、例えば『いのちがけ』とか、あるいは『いのちあってのものだね』とか、どういう言葉があるか言ってごらん？」と、聞くのです。

会場の皆さん方はどうでしょうか。〈いのち〉と聞いてどういうイメージを持ちますか？　そもそ

も〈いのち〉っていったい何でしょうか。

『古事記』『万葉集』にも出てくる日本古来のことばで、〈いのち〉というのは漢字で書く「生命」というのとは違うんです。『大言海』という日本語の語源も書いてある辞書によると〈いのち〉というのは「いきのうち」ということばがつまったものだというのです。つまり、〈いのち〉があるという場合には、呼吸しているということと繋がっていて、息をしているうち、いきのうち、〈いのち〉というふうになったという説です。「ち」というのは霊とか魂という意味もあるんですね。そういうふうに言われていますけれど、会場の皆さん〈いのち〉という言葉で、思いつくことを言ってみてください。

――　赤ちゃん

――　いのちの一回性

〈いのち〉のイメージと言ったとき「死」を思い浮かべた方は、どのくらいいらっしゃいますか？手を挙げた方が5人ぐらでしょうか。私が早稲田大学で二七七人の学生にアンケートをとりましたら、「死」というイメージを思ったというのが第一位で、六二人でした。私は予想外でした。時代を表しているのか、若者が〈いのち〉のこと真剣に考え、それなりに生きようと思っている表現なのでしょうか。その次に「一番大切なもの、最も重要で重みのあるもの、大事なもの」という答えでした。三番に「誕生」というイメージを思い浮かべ、四番目が「儚いもの」、五番目が「尊いもの・尊厳」、これ四十人ぐらいいます。それから「赤ちゃん」、「胎児」。続いて「水」。「一回性」。「輝いているもの」「生きる」等々です。人によって〈いのち〉のイメージが本当に違うということが良くわかります。

■世界で最初にクローンに成功した人

クローン時代に生きているという場合のクローンには二つの意味があると思います。生殖的な意味での生命体の産出ということで使っているクローンいう言葉と、原生動物などの細胞レベルでの分裂で使っているクローン。生殖的意味のクローンから考えると、さっき言ったように〈いのち〉の一回性、唯一性が遺伝形質の面では問われることになる。つまりあらゆる生命体は通常の場合、原生動物を除くと有性生殖で生まれてきます。有性生殖で生まれるということは、それまでとは違う生体が生まれてくるわけです。ヒトにしても特定の遺伝子の組み合わせが行われる確率はまったく偶然で、偶然の支配する中で人生というのは始まるのです。偶然であるがゆえに、人生というのは一体なんだろうか、どうして私はこの世に生まれてきたのだろうか、ということを考える機会が与えられると共に、それが未来に開かれている。生命というのはそれぞれが固有な一回限りの存在として未来に開かれているということになるわけです。

しかし、仮にクローン技術によって誰かのＤＮＡで人間を作ることになれば、遺伝的にＤＮＡの提供者と遺伝的形質が同じになる。つまり遺伝的資質が同じであるという点においては未来が閉ざされてしまうということになるわけです。

このようにクローン生殖には、唯一性による「かけがえの無さ」の否定、偶然性による「神秘性」の欠如、未来が閉ざされてしまうという「可能性の停

止」の問題、多様性を失わせる存在といった問題などが含まれています。またクローンは、遺伝的な父も母もない、つまり特定の遺伝子提供者の時を隔てた双児のような形で生まれてくる問題もあります。こんな根本的な問題が生殖的クローンでは問われているわけです。

クローンということばはギリシャ時代から使われていて「小枝」を意味するのですが、動物のクローン、つまりコピー動物を作るということで、一番最初は何で実験したと思いますか。

この実験をした人は、私が元おりましたアメリカのワシントンにあるジョージタウン大学ケネディ倫理研究所のトマス・キング所長です。一九五一年、世界で最初の動物のクローニングに成功したのは「おたまじゃくし」のクローニングでした。僕がトマス・キング博士と話していた時に、「リヒト、僕がね、クローンに成功したときに世界中からたくさん問い合わせの手紙がきたんだ。リヒト、日本からも手紙がきた。どこからきたと思う?」と聞かれました。みなさん、誰から来たか想像がつきますか。これは僕がトマス・キング博士から直接聞いたことです。昭和天皇の研究所だったのです。みなさんご存じのように昭和天皇は生物学者でした。北海道の阿寒湖のマリモの研究などで、世界的に生物学者としてよく知られた方で、その「御生物研究所」から手紙がきたというのです。岡村さんも、「この話って面白いね。日本から最初に来た手紙が Biologist の昭和天皇の研究所からだったのは」。と言っていましたけれど、一九五一年の段階で、問い合わせの手紙をキング博士宛に出しているというのは非常に興味深いと思うんです。

そうしたトマス・キングの創りだした、いわば学問的な研究の蓄積をふまえて、クローン羊ドリーが成功するわけです。そこで問われていることは、生命というのは、これまでは人間が関与できない、神秘的なものとされていた。操作可能になり、しかも生命の遺伝子のコピーとされるものまでが創れるようになってきた。クローン人間誕生の時代は、私たちの基本的な生命観に変化が起きてくるのではないかという人間にとって大きな問題が浮かび上がってきたということです。

クローン人間の作成について、国際的にはＷＨＯでもユネスコでも、勿論反対で、クローン人間を創ってはならないということははっきりとしているのです。人間は創ってはならないが、例えばクローン技術を利用して作った受精卵からＥＳ細胞、つまり胚性肝細胞ですが、それを取り出して操作し、臓器を作るとか、神経に由来する難病を治すとか、いろんな病気を治す手がかりを見つけ出す可能性があるかも知れないのです。つまり、難病などの「治療目的でのクローン技術研究」は推進すべきであるとイギリス等の諸国では積極的な対応を考えはじめました。もちろんクローン受精卵を人間の子宮に戻したり、あるいは動物の子宮、あるいは人工子宮か何かを使っての実験はやっていいのでは、ということに反対なことはいうまでもありません。

■今も生まれてくる奇形児

こういう世界の動向の中でクローン人間の誕生?は間近、というニュースがだんだん出てきているわけです。しかし、その可能性はあまり現実性をもっているようには思えません。

そもそも人間の生命の本体としての遺伝子の重要性に気がつき始めたのが一九五〇年代、ワトソンとクリックの五〇年代終わりのノーベル賞受賞が画期的な出来事でした。私自身は遺伝子の問題性に本格的に取り組み、その構造や機能を学び始めたのはベトナムでの出来事がきっかけだったのです。

ベトナムのサイゴン大学で教えていた当時、学生が私の家に北ベトナムが作成した秘密文書を持って話にきたのです。そのドキュメントの写真を見て私は大変ショックを受けました。いろんな奇形、障害をもった赤ちゃんが生まれていて、そして悲惨な状態にあるということを教えられたわけです。一九七〇年、いまから三十年前です。学生が言うのには、はっきりと枯葉作戦の影響だ。枯葉剤に含まれているダイオキシンの妊婦への影響で、遺伝的形質に障害が発生して、産まれてくる赤ちゃんに大規模な範囲で奇形がおきている、地域によっては、新生児はほとんど死んでしまうということでした。

いまから二年前、約三十年ぶりに、ハノイに行きましたが、ハノイ赤十字の方々にお会いしたとき、ジャングルには緑が再び還ってきて、自然は元に戻ってきたが、実際はまだ奇形の赤ちゃんが生まれていると話していました。

早稲田大学人間科学部に学んだ、かっての私の教え子である中川菜穂子さんがアメリカで製作したこのドキュメンタリー作品をご覧いただければ、「なるほど。木村さんの言っていることはこういうことなんだな」と枯葉作戦の実態とベトナム戦争の背景がよくわかると思います。これは何回見ても衝撃的な映像です。そこで登場してくる青春期の子供は、成長ホルモンが止まって小さいまま、手も足も短いままで、目鼻立ちが変型しています。それに目が潰れていたり、骨だけで筋肉がないような。歩けない子どももいるのです。

こういう遺伝障害の背景について書かれた本をサイゴンの古本屋で見つけました。僕がアメリカに行く前です。そのうちの一冊がこの『Biological Time bomb(生物学的時限爆弾)』でした。一九六八年の刊行で、私が買ったのは七〇年ですから、刊行されて二年後です。この中に遺伝戦争という章があるのです。この章には、これからの戦争はこれまでのような爆弾を落として相手を殺す、そういう戦争ではない。遺伝的に操作した生物化学兵器を作って、それを長い時間をかけて、民族の資質が低下して結果的に一民族が消えてしまうような爆弾をつくるだろう、と書いてあったのです。

正に、「遺伝子戦争」がはじまっていたのです。この本では genetic war と書かれていますが、遺伝子戦争の時代にわれわれは生きている、そういうことを強く感じました。さらに遺伝子戦争の未来展望ということも書いてあり、この一九六〇年代の終わりの本に書いてあるのは、生命の創造、試験管ベービー、死の延長、精神のコントロール、準人工人間……。このまま進むと生物学的時限爆弾が爆発する大変な時代がくると著者のテーラーさんは予言していたのです。

私はこれらのことを岡村さんと話したのを今でも覚えています。「木村君、これは大変な時代になるね」と岡村さんは言って、この〈いのち〉の問題をめぐってどう考えるか、今の時点ではっきりさせておかないと大変なことになると語り合いました。一九七五年、神戸の六甲山ＹＷＣＡで生殖クローニングの話をしたときには、日本ではクローニングのことは一言も出ていない時代だったのです。

■ヒトゲノム計画の背景

枯葉作戦にしても、遺伝子組換えにしても、新しい時代の展開の中で、大きなスケールで〈いのち〉の問題がいま問い直されている。つまり人間の生命を操作することのできる時代を、どう私たちは人間としてコントロールしていくか。私たちが技術に負けてしまうと、大変な時代になってしまうという危機感があって、その背景に、遺伝子操作をめぐるもう一つの大きな問題があるということに気が付いたのです。

それはいま、皆さん方知っているように、ヒトゲノム計画です。ヒトゲノムというのは人間の遺伝子の本体、人間を人間たらしめている「遺伝子」を全部解析しようという巨大科学研究計画です。これらのＤＮＡを全て解析すると人間のあらゆる病気の遺伝的傾向やある程度の遺伝的要因が全部わかってしまう。ですからその個人個人の遺伝的資質に合ったような薬剤の開発も可能になる。そういうデータを蓄積していこうとしているわけです。

あらゆる病気、例えば、心臓病や糖尿病など習慣病にも応用できるということもあって、推進されているのがヒトゲノム計画です。そして「これこそ未来の医療」といわれているのです。

ヒトゲノムの計画には、実は枯葉作戦と似たような悲劇があるのです。ヒトゲノム計画はアメリカの厚生省の管轄にある National Institutes of Health、いわば国立保健研究所で計画されている科学研究プロジェクトです。

その研究母体の前身はアメリカのエネルギー省で、そのエネルギー省の前身は ABCC でした。ABCC というのは Atomic Bomb Causality Commission といって原子爆弾戦傷委員会。これは広島と長崎に原子爆弾が落ちたあとに、生き残った被爆者たちが放射能によってどういう遺伝的な障害を負ったかを調べるための、とくべつな組織を日米合同で作ったものです。このときのデータを基にエネルギー省がヒトゲノム研究計画をしました。この計画があったからこそＮＩＨにあるヒトゲノム研究所が現在のような形でヒトゲノム計画を推進しているのです。

■体外受精は「福音」？

今日皆さんに配付した資料に、生殖医療との関係で、ロバート・エドワーズ博士の話が入っています。このロバート・エドワーズさんは、世界で最初の体外受精児を成功させた方です。体外受精児成功の五年前にお会いしたとき、私が大変感銘を受けたのは、エドワーズ博士が「人間はどこまでどういう技術を使って科学研究をしていいかというガイドラインが必要だ」とはっきりと指摘していたことです。同博士は医学専門家として、不妊症の悩みをもつ患者を救うのが使命であると、受精卵研究の積極的な意義を力強く語っておられました。

これはクローン研究も同じ事です。科学者はみなそう言うのです。クローン研究こそは究極の不妊治療であり、不妊症の方を助けるためであると。

しかし、七三年当時、体外受精技術はまだ完成されておらず、あくまでも仮定のこととして、検討を行っていたのです。このグループの中の賛成論者は、お父さんがいてお母さんがいる。そういう生殖医療の伝統的な方法に基づいて、科学的にお手伝いするという意味で、体外受精こそは不妊の女性にとっての「福音」だと積極的に評価して、これは自然の法則に則っているので神様によって祝福されると強調していたわけです。この技術はあくまでも正式に結婚している夫婦間にのみ使用されることが望ましいとの意見が圧倒的に多数をしめ、夫の精子と妻の卵子による受精卵研究については十分な情報の提供がなされ、同意を得たうえで、患者本人のためにおこなわれるのなら、それは正当化される、という言い方をしていたわけです。

このとき、私自身は生殖医療その他、クローニングの問題も含め、その時点で整理して、三つばかり要約しておきました。

第一に、人間の限りない欲望のために暴走しがちな科学技術の深刻な問題性と、将来における精子、卵子、母胎などの意図的な「モノ化・手段化・商品化」による「人間による人間創造」への危険性についての問題点です。

いまアメリカでは精子・卵子それから代理母、みんなコマーシャル化されています。僕が行った当時は代理母が一万ドル。いま二万ドルぐらいになっています。これは非常に問題があると思います。

第二に、これはクローニングの場合もそうですが、新しい「優生学」、つまり遺伝的な資質を両親が選んで、病気が起こらないようにするという形では、

新たに期待するという説がありますけれども、自分たちの価値観にあった資質の子どもを選択的に生むことへの問題点です。これはやっぱり子どもを意図的に生むという、一種の偶然性の排除に繋がってくることになります。病気を治すというのであるのならば許されるけれども、オリンピック選手やノーベル賞クラスの子どもをつくることは問題です。

第三に、遺伝病に悩む人々や不妊で赤ちゃんを生みたいという願いを持った人々を、温かく支えるために、先端医科学研究の成果の適正な利用を含め、当事者への全人的なサポートが求められていることなどの問題点を指摘しました。

この会議が一九七二年ですが、三十年を経た現在、人間の体細胞の遺伝子を用いて、意図的なクローン人間作成の可能性が出てきました。しかし、人間存在の根拠であるべき「人間としての自己同一性（アイデンティティ）」の崩壊をもたらすという観点から、ほとんどすべてのキリスト教会からは強い反対意見が表明されています。

私は、文藝春秋の『日本の論点２００２』に「人間生命の誕生を選択・操作・改良するのは、『人の尊厳』の否定である」というテーマで書いたのですが、仮に将来、クローン動物やヒトの初期胚細胞の実験・研究の蓄積によって、人間へのクローン技術適用の安全性が確認されても、人間作成を許すべきではないというのが私の考えです。

クローン技術によって作られた人間にとっては、その遺伝的資質と環境要因が密接に関わり合って形成される「人間としての独自性やその人らしさ」の一つの根源的なかけがえのない遺伝的ルーツが、「体細胞提供者と全く同じ」であり、人間としてのアイデンティティの根拠が崩れ去ることが大きな問題です。無性生殖で人間を作り出すというイメージは、従来からの子どもは天から授かる「子宝」としてきた両親の驚きや喜びの感情に致命的な変化を生み出すことになると思います。

つまり「新生児」ではなくて遺伝的な「旧生児」が生まれてくることだからです。これは結局、「世界中の何処にも、今までいなかった新しい人が産まれた」というよりも、期待の方が先にいって、その人の主体的で自由な人間的尊厳という根本的な問題が忘れ去られることになるのです。そういう形で子どもを作る人の意向に沿って遺伝的にデザインしていくことは、これは究極的な「child abuse（遺伝的幼児虐待）」であると私は指摘しました。

クローン人間が誕生するかも知れない時代に、私たちは人間生命の意味をもう一回考え直さなくてはいけないのです。前に述べたように、いのちの①唯一性、②偶然性と神秘性、③未来に開かれている可能性、④連帯性、⑤多様性等を踏まえた〈いのち〉のあり方は人間の存在の根拠にある考え方です。これらは人間の尊厳と基本的人権の根拠でもあるのです。これらの基本の考えは、医療においても看護においても、人権擁護の制度的仕組みでも、クローン人間を誕生をさせないための国際的共通理解なのです。私たちは、これからも〈いのち〉の問題について「先端医療技術」を手がかりにして考えることが非常に大事になってくると思うのです。

このような〈いのち〉の未来における問題点を、枯葉作戦とその被害者の遺伝的障害のビデオを見ながら、皆さんと一緒に考えたいと思います。（了）

事務局便り

◆ 岡村昭彦写真展のお知らせ

写真展示　8月1日（金）～8月7日（木）
長野県松本市浅間温泉神宮寺本堂アバロホール

岡村昭彦写真展「君ハ、アキヒコヲ見タカ？」
期間：8月1日（金）～7日（木）
10：00～17：00（入場無料）
場所：神宮寺本堂・アバロホール
詳細はＡＫＩＨＩＫＯの会ホームページ Information 参照

２００３年「いのちの伝承」
期間：8月1日～7日
場所：浅間温泉・神宮寺
本堂・アバロホール
〈内　容〉
▼『原爆の図』第1部「幽霊」を展覧
▼岡村昭彦写真展「君ハ、アキヒコヲ見タカ？」
国際報道写真家岡村昭彦の作品を展覧
▼8月5日：「原爆忌」
森山良子さんコンサート
▼8月8日：映画『折り梅』

尋常浅間学校8月のカリキュラム「２００３年―いのちの伝承―」の一部として、岡村昭彦写真展「君ハ、アキヒコヲ見タカ？」が開催されます。神宮寺・尋常浅間学校については、予約が必要なものもあります。詳しくは、神宮寺のホームページ **http://www.jinguuji.or.jp/**をご覧ください。

―いのちの伝承―プログラムとは？

１９８８年、『原爆の図』の画家、丸木位里・俊ご夫妻が、神宮寺（住職：高橋卓志さん）の本堂に８８枚の襖絵を描かれた因縁で、９８年より『原爆の図』全１５部のオリジナルを毎年1部づつ丸木美術館から借り受け、１５年かけてすべてを観るという展覧が始まりました。

その『原爆の図』を中心にして、戦争を伝え、平和を願う週間を設定し、「いのちの伝承」というイベントが同時に始まりました。すでに神宮寺では４５年前から8月5日の夜、原爆や大戦による被災・被害者の慰霊法要「原爆忌」を行っておりましたが、『原爆の図』の展覧でその内容に厚みが増し、いまでは全国からこの絵を観ることと真夏の一夜の法要に参加する方々が数多くいらっしゃいます。

９７年から神宮寺で始まった「尋常浅間学校」（永六輔校長・無着成恭教頭）は、高橋卓志さんの友人たち（小室等さん、筑紫哲也さん、おすぎさんなど）が次々に教師として訪れて、とてもにぎやかな学びの場となっています。

そのような関係から「いのちの伝承」プログラムは、尋常浅間学校が主催し、尋常浅間学校の生徒さんによって支えられ、今日にいたっています。

◆ **『夏期特別セミナー』のお知らせ**

昨年同様、8月9日（土）～12日(火)小布施町オープンハウス「しなのぐらし」から軽井沢の岩城邸へ。カヤノ平での自然学校（講師：畔上正雄さんと牧場長の東城厚さん）とセミナー（講師：米沢慧さん、玉木明さん他）どなたでも参加できます。希望者は7月30日まで事務局へ。（費用　1泊：1万5千円、2泊：2万5千円、3泊：3万円・交通費別）

◆ **原稿募集テーマ『岡村昭彦と私』**

ホームページ上で掲載する原稿を募集中です。４００字～８００字程度、記名、メールまたはＦＡＸでお寄せください。なお、掲載時期は事務局にご一任ください。（詳しくはＨＰ参照）

◆ **通信費の送金先**

この2、3年通信費を振り込んでない方は左記に通信費１０００円を振り込んでください。

口座番号　「００１７０―６―６１５１２３」
加入者名　「岡村昭彦の会」

『岡村昭彦の会』会報第十三号
発行　東京都江戸川区西小岩五―十一―二十七
戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局
TEL&FAX　０３―３６５７―８３８０
http: //akihiko.kazekusa.jp/
E-mail: akihiko@.kazekusa.jp